

学校编码: 10384

分类号\_\_\_\_\_密级\_\_\_\_\_

学 号: 12220101152564

UDC\_\_\_\_\_

厦 门 大 学

硕 士 学 位 论 文

试论日本文学的文体翻译  
——以吉本芭娜娜的《厨房》为例

日本文学の文体翻訳の一考察

一よしもとばななの『キッチン』を中心に

蔡 文 姣

指导教师姓名: 吴 光 辉 教 授

专 业 名 称: 日 语 语 言 文 学

论文提交日期: 2013 年 月

论文答辩日期: 2013 年 月

学位授予日期: 2013 年 月

答辩委员会主席: \_\_\_\_\_

评 阅 人: \_\_\_\_\_

2013 年 4 月

试论日本文学的文体翻译——以吉本芭娜娜的《厨房》为中心

蔡文姣

指导教师: 吴光辉 教授

厦门大学



## 厦门大学学位论文原创性声明

本人呈交的学位论文是本人在导师指导下,独立完成的研究成果。本人在论文写作中参考其他个人或集体已经发表的研究成果,均在文中以适当方式明确标明,并符合法律规范和《厦门大学研究生学术活动规范(试行)》。

另外,该学位论文为( )课题(组)的研究成果,获得( )课题(组)经费或实验室的资助,在( )实验室完成。(请在以上括号内填写课题或课题组负责人或实验室名称,未有此项声明内容的,可以不作特别声明。)

声明人(签名):

年 月 日



## 厦门大学学位论文著作权使用声明

本人同意厦门大学根据《中华人民共和国学位条例暂行实施办法》等规定保留和使用此学位论文，并向主管部门或其指定机构送交学位论文（包括纸质版和电子版），允许学位论文进入厦门大学图书馆及其数据库被查阅、借阅。本人同意厦门大学将学位论文加入全国博士、硕士学位论文共建单位数据库进行检索，将学位论文的标题和摘要汇编出版，采用影印、缩印或者其它方式合理复制学位论文。

本学位论文属于：

（        ） 1. 经厦门大学保密委员会审查核定的保密学位论文，  
于        年        月        日解密，解密后适用上述授权。

（        ） 2. 不保密，适用上述授权。

（请在以上相应括号内打“√”或填上相应内容。保密学位论文应是已经厦门大学保密委员会审定过的学位论文，未经厦门大学保密委员会审定的学位论文均为公开学位论文。此声明栏不填写的，默认为公开学位论文，均适用上述授权。）

声明人（签名）：

年        月        日



## 要 旨

1987 年、よしもとばななは『キッチン』という小説で文壇にデビューし、その独特な文体によって注目されるようになった。本論では、『キッチン』の文体を研究対象とし、近代文体の変遷からよしもとばななの文体の特質を把握し、更に、翻訳学の立場から、中国における『キッチン』の翻訳事情を検討し、文学翻訳における文体の翻訳の諸問題を明らかにしようとする。

本論の「はじめに」においては、日本辞典の解釈に基づき、日本の文学者や文体論者の解釈を参考にし、「文体とは何か」という定義を検討し、文学翻訳における文体の位置づけや理解をまとめ、本論の問題意識や章立てを提出した。

第一章においては、まず、よしもとばななの人生を顧み、氏の文学創作の契機や文学理念を明らかにし、内容と文体という二つの立場から『キッチン』の文学的性格を摘出し、中村明の「文体」という概念を利用し、『キッチン』の文体を考察することにする。

第二章においては、中国における『キッチン』の翻訳事情を紹介し、原作と訳本を比較し、文体の翻訳を検討する。

第三章においては、言文一致運動から『キッチン』までの近代日本文学の文体の変遷を紹介し、日本文学の文体は日本や日本人を理解する方法の一つであると指摘する。

本論の「終わりに」、文体の特性を明らかにし、文学翻訳における文体の問題を如何にして考え、理解するかを検討したい。

キーワード：よしもとばなな；キッチン；文体；翻訳

## 摘 要

1987 年，吉本芭娜娜以《厨房》登上日本文坛，并以其独特的文体引起了日本文学界的关注。本文以《厨房》的文体为例，从近代日本的文体变迁来把握吉本的文体特性，进而站在翻译学的立场来探讨《厨房》这一作品在中国的翻译现状，阐明文学翻译中的文体翻译的各个问题。

本论的序言基于日本辞书阐释的同时，以日本文学家与文体研究者的解释为参考，探讨了“文体是什么”，概述了文学翻译之中文体的定位与理解，提出了本论的问题意识与框架结构。

本论的第一章首先回顾了吉本芭娜娜的人生，提示了其文学创作的根本契机与文学理念，站在内容与文体两个立场来论述《厨房》的文学特性，并利用中村明的文体概念，论述了这一作品的文体的特点。

本论的第二章，介绍了《厨房》这部小说在中国的翻译，并通过原著与译著之间的比较分析，探讨了文体翻译的问题。

本论的第三章，阐述了从“言文一致运动”到《厨房》时期的近代日本文学的文体的变迁，指出日本文学的文体，是理解日本与日本人的方法之一。

本论的结论，阐明了文体的特性，并就文学翻译之际如何思考、理解文体的问题进行了探讨。

**关键词：**吉本芭娜娜 厨房 文体 翻译



## 目 次

はじめに.....	1
第一章 よしもとばななの文体と『キッチン』 .....	9
1.1 よしもとばななという女性作家 .....	9
1.2 『キッチン』の文学的性格 .....	13
1.3 『キッチン』の文体 .....	15
第二章 中国における『キッチン』の翻訳 .....	27
2.1 よしもとばななの研究と『キッチン』の翻訳 .....	27
2.2 『キッチン』の文体の翻訳 .....	29
第三章 文体の翻訳の再検討 .....	42
3.1 言文一致運動から『キッチン』にかけての文体の変遷 .....	42
3.2 日本語と文体の問題 .....	46
3.3 文体の翻訳 .....	49
終わりに.....	52
参考文献.....	53
謝 辞.....	59

## 目 录

序言.....	1
第一章 吉本芭娜娜的文体与《厨房》 .....	9
1.1 吉本芭娜娜 .....	9
1.2 《厨房》的文学风格 .....	13
1.3 《厨房》的文体 .....	15
第二章 《厨房》在中国的翻译 .....	27
2.1 吉本芭娜娜研究与《厨房》的翻译 .....	27
2.2 《厨房》文体的翻译 .....	29
第三章 文体翻译的再探讨 .....	42
3.1 自“言文一致运动”到《厨房》时期的文体变迁 .....	42
3.2 日语与文体的问题 .....	46
3.3 文体的翻译 .....	49
结语.....	52
参考文献 .....	55
谢辞.....	59

## はじめに

### 文体とは

文体とは何か？この概念自体を考える場合、まず『広辞苑』（第六版）から検討してみよう。この辞書によれば、文体は次のようにまとめられている。

①文章のスタイル。語彙・語法・修辞など、いかにもその作者らしい文章表現上の特色。

②文章の様式。国文体・漢文体・洋文体または書簡体・叙事体・議論体など。

この解釈から明らかなように、スタイルであろうと、様式であろうと、『広辞苑』における文体という概念の解釈は、「文章」という概念に重点を置いている。

それに、『広辞苑』（第六版）において、文体論について、次のような解釈がなされている。

①言語表現の個性的特色を特定の作家・国語（民族）・時代・流派などについて研究する。

②バイイの説では、ある言語の情意的表現手段を研究・記述する言語学の一分野。つまり、文体研究の要素を表現手段に絞っている。

このような『広辞苑』において「文章」という概念に重点をおくのに対して、『新明解国語辞典』の中で、次のように解釈されている。

①その時代（ジャンル）の文章に特有な表現様式。

②その作者が素材を形象化する方法。（狭義では、表現技術の上に見られる特徴）

つまり、作者をも文体という概念の中に取り入れるだけでなく、「文体」という概念をさらに「広義」と「狭義」に分けている。とりわけ文体の「時代性」、「形象化」をより強調している。

このような辞書の解釈の中で、「作者」の特有の表現様式という解釈がなされている。このような「作者」はどこまでも独立的な主体としての文学者、あるいは言語学者ではないかと思われるであろう。実は、文学・言語学をはじめとする「文体」の研究者は、多くの立場から解釈を試みた。

代表的な文学研究者として加藤周一は、文体について次のように述べている。

文章の意味内容ではなく、その形式的な性質の中で、文法的性質を除くものの総体を指すと考えよう。文法的性質は、すべての文章に共通するのである。文体は、ひとつの文章と他の文章と形式的に区別する。<sup>①</sup>

つまり、文体は、文学者が独自の性格を言い表し、自己と他者との区別を明らかにし、自分の文体イコール自分の性格がある文学ということを象徴しているように思われる。そのみならず、文体は、ただの語彙や修辞など個別の問題ではなく、どこまでも総体として現れるものである。

このような文学者の理解に対して、文体論研究者の中村明は、文体を文体論の研究対象として次のように定義している。

文体は表現主体によって開かれた文章が、受容主体の参加によって展開する過程で、異質性としての印象、効果を果たす時に、その動力となった作品形成上の言語的な性格の統合である。<sup>②</sup>

詳しく言うと、「表現主体」は言語情報の送り手、文学作品の作者を指す。それに対して、「受容主体」は言語情報の受け手、文学作品の読者を指す。文体は文章の特色である。「異質性」は個々の構成要素がことごとく標準から逸

<sup>①</sup> 加藤周一. 文体 [M]. 東京：岩波書店. 1996、第 449 頁.

<sup>②</sup> 中村明. 日本語の文体 [M]. 東京：岩波書店. 1993、第 161 頁.

脱する訳ではなく、表現主体と受容主体の間の「異質性」を指す。言い換えれば、作者と読者という、主体と主体とのぶつかりを、文体现象の動的な展開、そして、統合として捉えようとした点にあると中村明は指摘している。

このように文体の定義はさまざまであるが、率直に言えば、日本語の文体とは一体何か？ウィキペディアフリー百科事典を参考にしたら、それは大雑把に文体を二つにまとめ、より分かりやすく解釈されている。

第一、歴史的にみれば、「和文」「漢文」「和漢混淆文」、「だ・である調」のような常体、「です・ます調」のような敬体など日本語の文体。

第二、現実では、作家や作品に固有の表現、ある集団に固有の特徴（若者の文体など）というような言葉表現の特徴。

本論では、文体を「作家や作品に固有の表現」という解釈からよしもとばななという文学者の文体について論述しようとする。ただし、加藤周一の「文法的性質」を歴史の立場、すなわち近代以来の日本語の文体変遷からもう一度考えれば、「すべての文章に共通するもの」としての「文法的性質」はやはり、各時代の性格に注目すべきであろう。したがって、「文法」をも文体の考察の中に取り入れることにする。

さらに、このような概念から出発し、中村明による文体の九つの着眼点、すなわち、①作品世界②表現態度③文章展開④文形成⑤語法⑥語彙⑦表記⑧修辞⑨体裁、を念頭に置き、検討しようとする。その中で、中村氏が言う「語法」は加藤氏に除かれた「文法的性質」であろう。この九つの着眼点の中で、作品世界、表現態度、文章展開、体裁というのは、全体的に把握すべき要素であるが、文形成、語法、語彙、表記、修辞はより具体的で、捉えやすいものとして、文体を考察する場合の出発点であるように思われる。

## 文体と翻訳

文体と翻訳という問題は、しばしば提起されている。この問題を考える場合、一つの前提、すなわち、「近代」というキーワードを忘れてはならない。なぜかという、すでに話した文体という概念から明らかなように、「異質性」とか、「主体」とか、「区別」とかいったものを文化の立場から考えれば、近

代以降の問題として取り扱われている。簡単にいえば、それは東洋と西洋、さらに、西洋を中心に、東洋がそれに従うという形で現れてくる「近代」において、文体という問題、さらに文体と翻訳の問題は初めて提起されているのである。

中国の場合、1898 年、嚴復が『天演論』の序文で「信、達、雅」の翻訳標準を提起している。<sup>①</sup>嚴復によると、「信」は意味が原文に忠実することで、「達」は形式に拘らず、できるだけもとの意味を求めることで、「雅」は文才ある文章表現のことである。現在翻訳に携わる方は、文学、文体学の立場で「雅」に「神韻」（味わい）というような新しい内容を付与し、翻訳する際には原文の文体を保たなければならないという新しい要求も提起されているが、嚴復の本義において、文体を「文才」の範囲に置き、詳しく言及していないのである。

五四運動以後、白話文運動によって、古文と白話文との区別から文体とは何かと考えられる。白話文運動の代表的な人物の魯迅は「翻訳は両面が両立するようにしなければならない。一つは理解されやすいこと、もう一つは原作の姿を保つこと。」と主張している。<sup>②</sup>「原作の姿」というのは、文体のことを指す。それに、『關於翻譯的通信』において魯迅は、翻訳する際は、「新しい内容を輸入するのみならず、新しい表現方法も輸入しなければならない。」と主張している。<sup>③</sup>このように、原作と訳作の対立を意識し、魯迅は「直訳」の翻訳方法を主張し、「直訳」の方法で外来の文学を翻訳し、中国の白話文の成立に貢献した。

魯迅の「直訳」に対して錢鐘書は、文学翻訳の最高水準は「化境」であると主張している。錢鐘書によって、「文学翻訳の最高な理想は『化』にあると言えるであろう。作品を一つの言語からもう一つの言語に変わるには、習慣の差異でぎこちない言葉や無理なつながりを翻訳に表現してはならず、同時に原作の文体を保つことである。」<sup>④</sup>つまり、原作の文体と翻訳の文体を対立させる代わりに、錢鐘書は「化」を架け橋として、両者の融合の道を探し、調

<sup>①</sup> 王向遠. 20 世紀中國文學翻譯之爭 [M]. 南昌: 百花洲文藝出版社百花洲、第 65 頁.

<sup>②</sup> 王秉欽. 20 世紀中國翻譯思想史 [M]. 天津: 南開大學出版社、第 221 頁.

<sup>③</sup> 王秉欽. 20 世紀中國翻譯思想史 [M]. 天津: 南開大學出版社、第 121 頁.

<sup>④</sup> 王秉欽. 20 世紀中國翻譯思想史 [M]. 天津: 南開大學出版社、第 243 頁.

和の状態を求めている。

最近の研究というところ、劉宓慶の「翻訳風格論」が挙げられる。劉宓慶は、文体学の理論を引用し、翻訳における文体研究対象は「ただ原語の文体表現手段だけではなく、如何にして訳文を原語の文体にふさわしい表現にすることでもある。」と指摘した。<sup>①</sup>その上に、劉氏は「風格符号体系理論」（文体記号符号体系理論）という文体翻訳の方法論を提起し、文体分別の方法や文体の表現方法をも詳しく論じている。

このように、中国における文体翻訳の理論は、嚴復の「信、達、雅」、魯迅の「信順説」、錢鐘書の「化境説」、劉宓慶の「翻訳風格論」などのように、純粋な理論から翻訳の方法に至るまで詳しく論述し、翻訳の「文体」の問題を明らかにしようとする。

日本の場合、二葉亭四迷を始め、数多くの作家や翻訳家は、文体の翻訳に論及した。まず、文体の翻訳について、『余が翻訳の標準』において二葉亭四迷は、「外国文を翻訳する場合に、意味ばかりを考えて、これに重きを置くと、原文をこわす虞がある……意味を移すばかりでなく、その文調も移さねばならぬ。厳しく言えば、行住坐臥、心身を原作者のままにして、忠実にその思想を移す位でなければならぬ。此れ実に翻訳における根本的な必要条件である。この際に在ては、徒にコンマやピリオド、又はその他の形にばかり拘泥してはいけない、まず根本たる思想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻訳するようにせなければならぬ。」と述べている。<sup>②</sup>

この論述から明らかなように、二葉亭四迷の場合、いわゆる文体の翻訳は、第一に、文体の翻訳を見落としてはいけない。それは明治時代、日本は西洋文化を輸入するため、文体の革新を求めているからである。第二に、原文に忠実すること自体は、文体の翻訳、即ち、「異化」（相対化）の手段である。第三に、忠実と言っても、原文の形式に拘ってはならない。要するに、二葉亭四迷にとって文体の翻訳は、原文の文体の「再現」にほかならない。

それに対して、現代翻訳研究者の平子義雄は『翻訳の原理——異文化をど

<sup>①</sup> 劉宓慶. 2005. 新編當代翻譯理論 [M]. 北京: 中國對外翻譯出版公司、第 239 頁.

<sup>②</sup> 二葉亭四迷. 余が翻訳の標準. 青空文庫.

[http://www.aozora.gr.jp/cards/000006/files/384\\_22428.html](http://www.aozora.gr.jp/cards/000006/files/384_22428.html)

う訳すか』の中で、文学言語を「美的言語」と見なし、「美的テキストの翻訳は、当てはめ・翻案など、訳者の才能に任される部分が多い。訳者の自由裁量の部分が多いということは、翻訳が難しいということである。美的言語の翻訳はほとんど創造に近い」と述べている。<sup>①</sup>

この論述の中で、ベンヤミンの影響を受け、平子はまず、翻訳の境界ではなく、言葉の問題、いわば「美的言語」の翻訳を取り上げている。平子によれば、「美的」は「美しい」の意味ではなく、「感性・感覚に関する」という意味である。「うまい」と「おいしい」のように、概念では区別されていないが、言語の言語的現実によって表現される言葉のニュアンスが違っている。こうして考えてみれば、美的言語における言語の「形式」は「内容」のための「道具」ではなく、「内容」のための「機能」としてあるものである。さらに、文学の内容よりも、むしろ「形式」のほうが翻訳にとって重要であると思われる。

次に、「テキスト」の概念について説明する必要がある。「テキスト」は狭義の言語を超え、「言語を用いてなされた発話のまとまり」、その時、その場で一回だけ成立した個性的なものである。つまり、文体の翻訳を考える場合、我々は言語そのものの意味だけではなく、それをコンテキストの一部として理解すべきである。

最後に、平子義雄は文体の翻訳が「再現」ではなく、「創造に近い」ものであると指摘している。言い換えれば、文体の翻訳を実現させるのは、どこまでも訳者である。美的言語の翻訳を実現させるには、どこまでも訳者の才能によるものである。したがって、文体の翻訳は始終に、訳者の創造力或いは想像力にかかわり、いわば、「創造に近い」というものになるのである。

二葉亭四迷も平子義雄も、文学翻訳における文体の重要性を指摘している。二葉亭四迷の翻訳への感想に対して、平子義雄は、もっと詳しくそれを解釈している。とりわけ、文体の翻訳が「創造に近い」ものであるという表現から、文体の翻訳は文体の「再生」を求めているものであろう。このような新しい理解に基づき、さらに、それはいったい「再現」なのか？「再生」なの

<sup>①</sup> 平子義雄、翻訳の原理——異文化をどう訳すか [M]、東京：大修館書店、1999、第164頁。



Degree papers are in the "[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)". Full texts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to [etd@xmu.edu.cn](mailto:etd@xmu.edu.cn) for delivery details.

厦门大学博硕